

Title	ロッシャーの歴史経済學の根本思想とヘーゲル哲學
Author(s)	米田, 庄太郎
Citation	經濟論叢 (1927), 24(5): 856-875
Issue Date	1927-05-01
URL	https://doi.org/10.14989/128537
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷四十二第

行發日一月五年二和昭

論叢

分配論の性質 九州帝國大學 教授 文學博士 高田 保馬

中世の港 教授 文學博士 三浦 周行

勤勉獎勵目的の課税 教授 法學博士 神戶 正雄

純粹國家 助教授 法學士 作田 莊一

說苑

ロッシヤーとヘーゲル哲學 講師 文學博士 米田 庄太郎

ブルゲン氏の諸社會主義評論 教授 法學博士 田島 錦治

琉球最後の王朝とペルリ提督 教授 法學博士 山本美越乃

雜錄

指數の形式と指數の目的 助教授 經濟學士 蜷川 虎三

比較性なき統計的計數 經濟學士 菊田 太郎

法令

銀行法・震災手形損失補償公債法・震災手形善後處理法・兌換銀行券整理法・公益質屋法・海外移住組合法・輸出絹織物取締法

(禁 轉 載)

說苑

ロッシャーの歴史經濟學の根本思想と

ヘーゲル哲學

米田庄太郎

(一) 歴史經濟學の形成に於けるロッシャーとマルクス

獨逸歴史派經濟學の創設者として、普通に經濟學史上擧げられて居るのは、ロッシャーとクルースとヒルデブランドとの三人である。併し余はカール・マルクスも亦、其等の人々と同様に歴史派經濟學の創設者の一人と認めらる可きであると考へる。(Roscher, 1817-1894. Kries, 1821-1898. Hildebrand, 1812-1878. Karl Marx, 1818-1883) 所謂科學的社會主義の創設者としてのマルクスの功績が、あまりに赫灼たるが爲めに、歴史派經濟學の創設者の一人としての彼の意義は、經濟學史上寧ろ無視されて居るかと思はれる。併し純經濟學史上から考察すると、彼の純經

濟學的貢獻は、根本的には彼の歴史學的或は歴史哲學的見解から産出されたるものと、認めらる可きであつて、隨ふて吾人は彼を以て歴史派經濟學の最も重要な創設者の一人と、見做さねばならないと思ふ。そうして今マールクスを歴史派經濟學の創設者の一人と見做し、其の經濟學的根本思想を、普通に先づ第一に歴史派經濟學の創設者と、認められて居るロツシヤ一の經濟學的根本思想と比較對照して見ると、吾人は歴史派經濟學の形成に就て、興味ある又重要な幾多の事實を發見することが出來ると思はれる。此處に余は其等の事實の一に就て少しく論じて見たいと思ふ。

却說ロツシヤ一の經濟學的根本思想とマールクスの經濟學的根本思想とを比較して見ると、歴史派經濟學の形成に於て、二つの異なる方向の存立して居たことが學ばれる。其の一は歴史學を哲學から論理學的或は學問論的に根本的に區別し、兩者は學問論的に相對立するものと認め、かくて歴史學を哲學から全く獨立させ、そうしてかゝる意味での歴史學的一科學として經濟學を新たに建設せんとする方向である。其の二は之れに反して歴史學は根本的に哲學によりて規定せる可きもの認め、そうして根本的にはかゝる意味での歴史學的一科學と見て經濟學を建設せんとする方向である。前者は即ち吾人がロツシヤ一に於て見る處の方向にして、後者は即ち吾人がマールクスに於て見出す處の方向である。

ロツシヤが現實態の學問的考察を根本的に二種に大別し、其の一を哲學的考察と稱し、偶然的事項或は性質を除去して普遍的抽象の方法によりし、現實態を概念的に把握せんとするものであると解し、其の二を歴史學的考察と稱し、現實態を其の現實にあるがまゝに、描寫的に復現せんとするものであると解して居るのを見ると、彼は今日の學問論に於て立てられる自然科学と歴史科學との區別を、既に大體上理解して居たもの、様に思はれるが、併し其の歴史學的考察なるものを更に詳しく論述するに當つて、夫れはヤハリ普遍的法則或は自然法則殊に發達法則を發見することを、其の認識目標となすものと説いて居るのを見ると、彼はまだ自然科学と歴史科學との區別を理解して居なかつたことは明白である。そうして其の經濟學もヤハリ普遍的法則を發見せんとするものであると解する點に於ては、彼はマールクスと一致して居るのである。併しロツシヤは上に述べし如くに、歴史學を學問論的に根本的に哲學とは異なるものと見て居るが、マールクスは之に反して歴史は根本的に哲學によりて規定されるものと解して居るので、かくて彼は歴史學は根本的に哲學に依存し、之れと獨立して居るものとは解して居なかつたと思はれる。

今ロツシヤが歴史を哲學的思辨の支配から解放し、學問論的に歴史學を哲學から獨立せる科學として確立せんとするに當つて、主として其の目敵として居たのは、ヘーゲルの哲學的歴史觀

であつた。つまり辨證法によりて歴史を根本的に規定せんとする傾向であつた。然るにマールクスが歴史は根本的に哲學によりて規定されて居ると見たのは、それはつまり歴史的發展は根本的には辨證法によりて規定されて居ると考へたからである。即ち歴史的發展は辨證法的であると考へたからである。かくて歴史或は歴史學の方法論的考察に於て、ロツシャーは歴史に於けるヘーゲルの辨證法の適用の排斥を目じるしとして、歴史學を哲學から獨立させんとして居たのに對して、マールクスはヘーゲルの辨證法を歴史に適用することによつて、歴史の論理的本質を規定し、歴史學の概念を根本的に規定せんとして居たのである。要するに歴史學の方法論的考察に於ては、ロツシャーとマールクスとはヘーゲル哲學に對して、相互に正反對の立場に立つて居たのである。

然るに此處に又奇妙なる事實が発見される。マールクスは歴史學の方法論的考察に於ては、ヘーゲルの哲學的方法即ち辨證法を承認して、之れによりて歴史の論理的本質を規定して居るが、併し歴史學の實質的考察に於ては、ヘーゲル哲學を全然排斥し、唯物主義的に歴史的發展を説明せんとして居る。然るにロツシャーは之れに反して、歴史學の方法論的考察に於ては、ヘーゲルの如く辨證法的に歴史の論理的本質を規定せんとする見解を極力排斥して居るが、併し歴史學の實質的考察に於ては、ヘーゲルの概念説及び分出説或は流出説 (Emanationismus) に大に接近して居

るのである。そうして若し彼が實際上なして居る如く、彼の宗教的信仰を以て抑止したのでなかつたならば、又純論理的に徹底的に推究して行つたのであつたならば、到底分出説に到着せざるを得なかつたであらうと思はれる。要するに歴史學の方法論的考察に於ては、ロツシャアはヘーゲルを離れ、マールクスはヘーゲルに接して居るに反して、歴史學の實質的考察に於ては、ロツシャアはヘーゲルに接し、マールクスはヘーゲルを離れて居るのである。そうして右の關係に注目することは、歴史派經濟學の形成を究明せんとするに當つて、甚だ重要な又興味ある一問題であると思ふ。併しマールクス説とヘーゲル哲學との關係に於ては、近來我國のマールクス主義の學者も大に研究されて居るから、余は此處には只上に述べしロツシャアの思想とヘーゲルの思想との關係に就て、少しく述べるだけに止める。但し以下述ぶる處は、主としてマックス・ウエヴァアのロツシャア研究を材料として立説せるものである。

(二) 概念と現實態との不合理的割目

今ロツシャアが哲學によりて歴史を規定することを大に排斥し、歴史學を哲學から獨立させる必要を主張せる根本的理由となつて居るものは、概念から現實態を演繹すること或は引き出すことは出来ないと思ふ彼の思想、詳しく云へば抽象的な概念から具體的な現實態を演繹し引き出す

ことは出来ないと言ふ彼の思想である。つまり彼は概念と現實體との hiatus irrationalis (不合理の割目) を承認したのである。そうして此の概念と現實體との不合理的割目の思想を論理的に徹底して、彼の歴史學の概念を展開して行くときは、歴史學は何等の概念や法則をも構成す可きものではないことになる。夫れは概念や法則を立てることを、其の認識目標となす可きものではないことになる。かくて彼は哲學的眞理及び必然性は空虚な空間に於て妥當するものにして、歴史學的なるもの、範域に下る時は、其の妥當性を失ふふと同じく、歴史學は哲學的概念發達をとり入れんとする時は、自から消滅すると説いて居る。彼の考へる處によれば、具體的な歴史的制度及び事件は一の概念體系の一部分であり得ない。そうして歴史學者の仕事は、一の最高概念を立てることではなくして、一の全體直觀 (Gesamtschauung) を立てることである。又此の全體理念 (Gesamtlidee) は一の公式或は定義されたる概念中に、充當的に攝取され得るものでない。歴史學は詩歌の如く充實せる具體的現實的生活を把握せんとするものである。是等の言述によりて見ると、ロツシャーは歴史的不合理性の本質を適切に認識して居た様に思はれる。

然るに彼が右に述べし如くに歴史學の概念を論述して居るのは、つまりは只歴史に於けるヘーゲル辨證法の適用を排斥して、歴史學を自然科学と共通の經驗の地盤に、据え附けんとするに過ぎなかつたので、決して自然科学に對する歴史科學の論理的特質をよく理解して、新たに歴史科

學を建設せんとするのではなかつたのである。かくて彼は歴史學は自然科學と只其の取扱ふ材料を異にするだけで、方法的にはやはり經驗に基いて普遍的法則、自然法則を發見せんとするものであると論じた。併しそうであるとすると、概念と現實態との不合理的判目は存在しないことになる。がロツシヤはヤハリ此の判目の思想を固持して居た。それで彼は論理學的に嚴重に區別さる可き二種の「概念」を混同するに至つたのである。そうして其の點に於て先づ彼の根本思想とヘーゲル思想との接觸點が見出されるのである。

(三) ロツシヤの思想に於けるヘーゲル概念論及

び分出主義の混入

今概念と現實態との不合理的對立を承認し、そうして歴史學は現實態を、其の現實にあるがまゝの充實せる具體的形態に於て、把握せんとするものであると解しながら、しかも歴史學は法則殊に發達法則を發見せんとするものであると考へるは、明かに論理的矛盾である。ロツシヤは此の論理的矛盾を明かに意識して居なかつたが、併し暗に之を感じて居たと思はれる。そうして此の論理的矛盾を除去し、現實態の現實的把握を概念或は法則に練り上げようとするのが、即ち暗々裡に彼の頭を支配して居た欲求であつたかと思はれる。

併し現實態の現實的把握を概念或は法則に練り上げようとする事、即ち概念と現實態とを合理的に結び附けようとする事が、概念と現實態との不合理的割目を認めること、矛盾しない爲めには、概念の意味を變更せねばならぬ。即ち概念を個別的具體的現實的なるものに對立する、普遍的類的抽象的觀念的なるもの、兩者の間には反比例的關係が存し、概念が概念的であるほど現實態から遠ざかり、現實態が現實的であるほど概念から遠ざかるものと見る思想を變更して、概念は其のまゝで現實態として顯現し、現實態は其の儘で概念に包括されるものと解しなければならぬ。つまりヘーゲル概念論の立場をとらなければならぬ。

ヘーゲル概念論の立場に於ては、普遍概念は形而上學的實在にして、個別物及び個別過程を其の實現場合として包括し、夫れ自身から分出させるものである。かくて最高概念の本質及び妥當性に關する此の分出主義的解釋にありては、概念と現實態との關係は論理學的に、一方に於ては嚴密に合理的に思惟し得られ、即ち現實態は普遍概念から下降的に演繹し得られ、そうして他方に於ては同時に全く直觀的に把握し得られる、即ち現實體は概念へ上ることに於て其の直觀的實質を毫も損失しないのである。換言すれば概念の内包と外延とは、其の大きさに於て相互に反對せずして相覆ふものとなる。是れ個體は只類の見本であるだけでなく、概念を表現する全體の部分であるからである。つまり總てのものが演繹され、或は引き出されねばならない最も普遍的な

る概念は、同時に其の内容の最も豊富な最も充實せる概念となるのである。約言すれば概念内容は形而上學的實在として、現實態の裏に存立し、己れ自身から必然的に現實態を産出するものとなる。

今概念と現實態、即ち抽象的類的概念と具體的個別的現實態との不合理的割目を承認して、しかも此の不合理的割目を除去して概念と現實態とを合理的に徹底的に結び附けんとすれば、上に述べしが如くに、概念の意味を變更し、ヘーゲル分出主義の立場をとつて考察せざるを得ないのと思はれるのであるが、かくてロツシャアは表面に於ては或は意識的には、大にヘーゲル哲學を排斥して居るに拘らず、裏面に於ては或は無意識的には、ヘーゲル哲學の立場に接近せざるを得なかつたのである。此處に此の事を證示する爲めに、先づロツシャアが、事物の因果的結合において、「より多く重要と見えるものが、より少なく重要なるもの、原因と稱せられるのは」(das Wichtigere-Scheinende die Ursache des minder Wichtigern zu nennen) 科學の慣例であること云ふて居る事に就て、少しく考へて見よう。

此の「より多く重要」と云ふ語は、ロツシャアが之を用ひて居る場合に就て詳しく吟味して見ると、決して只より多く類的に普遍的なるものを、意味するだけでないことは明かである。夫れはヘーゲルが普遍的なるものと稱するもの、意味を含んで居ると認めざるを得ない。然らざれば此

の語の意味は完全に理解されない。要するにロツシャヤーは此の語の表示する思想に於ては、知らず識らずにヘーゲルの概念論及び分出主義の立場に接近して居るのである。併しロツシャヤーは意識的に其の立場をこり込んだのでないから、否な意識的には寧ろ其の立場を排斥せんとしたのであるから、云ふまでもなく其の立場を純粹に保持したのでない。そうして彼が意識的にどつた立場は、つまり概念を類的普遍的なるもの、意味に解し、そうして普遍的概念は抽象によりて、現實態から上りつゝ構成されたるものであるが故に、其の逆に、現實態は普遍的概念から下りつゝ、演繹し得られるものでなければならぬと云ふ立場である。

要するに此處にロツシャヤーは二種の「概念」、即ち抽象的類的普遍的概念と具體的普遍的概念とを混同して居るのである。一層適切に云へば類的普遍的概念の中に具體的普遍的概念を含ませて居るのである。併し此の二種の「概念」は論理的に嚴密に區別さる可きもので、決して混同されてはならぬもの、又一を他の中に含ませ得るものではないのである。かくてロツシャヤーの立場は、論理的矛盾を含んで居るので、統一的整合的なものではない。併し此處に余の特に注目せんとするのは、彼の立場に含まれる論理的矛盾其の物でなくして、其の矛盾によりて證示されて居るヘーゲル哲學の要素の混入である。概念と現實態との不合理的割目を承認しながら、しかも此の割目を除去して合理的に兩者を結び附けんとする以上、ロツシャヤーは如何に意識的にはヘーゲ

ル哲學を排斥して居ても、知らず識らずにヘーゲル哲學の立場に接近せざるを得なかつたのである。

(四) 國民經濟の概念

余はロッシャーの根本思想に於けるヘーゲル哲學要素の混入を、更に彼の歴史的國民經濟學の二三の基本概念に就て考察して見たいと思ふが、先づ彼の國民經濟の概念に就て考察する。

今ロッシャーは彼の國民經濟の概念を、歴史法學派の國民法律の概念を模範として、構成して居ると思はれるのであるが、歴史法學派は要するに啓蒙時代の立法的合理主義に對する鬭争に於て、一の國民的共同團體の中に生まれ、其處で妥當する法律は、普遍的原理から演繹し得られない、根本的に不合理なる性質を有するものなるを主張したのである。そうして歴史法學派は一國民の法律は其の國民の生活の他方面から離れて、獨立に成立し又發達するものでなく、常に他の一切の方面と不可離的に聯結して、成立し又發達するものなるを大に強調し、更に眞實なる各國民法律は、必然的に個性的性質を有するものなるを論證する爲めに、國民の法律、言語、及び其の他一切の文化財の創造者と認めらる可き、ヤハリ必然的に不合理個性的なる國民精神を實體化したのである。かくて歴史法學派にありては、國民精神の概念其物はまた論理學的に加工精

練されない直觀的個別現象の多様を當面に表示する、一時的的手段概念或は補助概念として取扱はれて居るのでなくして、形而上學的性質の一の統一的實體として取扱はれ、無數の文化諸勢力の合成果として認められて居るのでなくして、國民の一切の個別的文化諸現象が分出する實在的基本として認められて居るのである。

歴史法學派は國民精神を右に述べしが如くに考へ、そうして其の一分出として、特に國民法律を研究したのであるが、併し全く同様な意味にて國民經濟を國民精神の一分出として研究する、歴史的國民經濟學の存立し得ることは、同派の立場からして明かに推斷され、承認され得るので、要するに歴史的國民經濟學は歴史法學の立場或は根本精神からして、當然生まれ出づ可き他の一方面であつたと云ひ得られるのである。吾人は歴史法學の誕生に於て、歴史的國民經濟學の誕生が既に豫告されて居ると考へ得る。かくてロツシヤの歴史的國民經濟學の概念は、根本的には歴史法學の精神から生まれて居るのである。

ロツシヤもヤハリ「國民性格」の形而上學的統一性を信じ、そうして國民とは國體及び法律の漸次的發達と同様に、經濟の漸次的發達を其の生活過程の一部分として、夫れ自身に於て體驗する處の其の個體であると考へた。彼は國民經濟は國民と共に生まれるもの、人間を人間たらしめる素質及び本能の自然的産物であると説いて居る。彼は國民を以て、政治的に結合されたる市民

の當面の一全體であると見る、啓蒙哲學の合理主義的考察を以て満足せず、抽象によりて收得されるかゝる類概念を排斥して、國民とは文化運載者として重要な一全體の實在の直觀的總體であると考へたのである。

以上述べし如くロツシヤは先づ歴史法學派の國民概念を傳承し、又同派の國民法律の概念に準じて、國民經濟の概念を立てたのであるが、併し彼はさきに述べし如く、方法論的には總ての科學は自然科學であると考へ、歴史學の認識目標もヤハリ法則殊に發達法則の發見に在ると認めたのであるから、實際の研究に於ては一切の個別的具體的國民を包攝する類的普遍的國民概念を構成し、そうしてかゝる類的普遍的國民の發達の自然法則として、國民經濟の發達法則を發見せんと企だてゝ居る。かくて彼は國民及び國民經濟の概念に於ても、ヤハリ抽象的類的普遍的なるものと、具體的普遍的なるものとを混同したのである。

今歴史法學派の主張するが如き國民概念を承認し、其の精神を常に固持して論理的徹底的に考察するに於ては、論理的に正當に立て得られる普遍的國民概念は、具體的普遍的國民概念である可きであつて、決して抽象的類的國民概念である可きでないと思はれる。此の場合には吾人はヘーゲル概念論の立場に従ふて考察せねばならないのである。さればロツシヤは意識的には抽象的類的國民概念を設定せんとして居たに拘らず、知らず識らずにヘーゲル概念論の立場に接近せ

る思想を、其の中に混入せざるを得なかつたのであると思はれる。一方に於て歴史法學派の主張せるが如き國民概念を承認した以上は、彼の立てんとする抽象的類的國民概念は、到底純粹なるものでは有り得なかつたのである。

(五) 國民經濟の發達法則

前節に述べし如く、ロツシャーは歴史法學派の國民概念を承認したに拘らず、實際の研究に於ては彼は自然科學的に類的國民概念を立て、國民の發達法則隨ふて國民經濟の發達法則を、類的國民の發達の自然法則として考察したのである。更に彼は類的國民の發達を個體的生物の發達に準じて考察し、生物學的類比によりて隆盛、老衰及び滅亡を、國民が必然的に通過す可き發達階段と考へた。かくて彼が國民の發達法則と云ふは、つまり一切の國民の生活が必然的に隆盛、老衰及び滅亡の三階段を通過し行く自然的順序を意味するものである。

今一見すればロツシャーの右の國民發達法則は、純自然科學的法則であるが如くに考へられるが、併し彼は如何なる方法にてかゝる法則を立てたか、又彼は實際に於てかゝる法則から何を期待したかを詳しく吟味して見ると、夫れは決して純自然科學的な自然法則ではないことが覺られるのである。

一方に於てはロツシャアは、右の國民發達法則を生物學的發達法則に基いて設定せんとし、かくて之を演繹的に設定せんとして居るが、併し他方に於ては、個々の具體的國民に就て事實を經驗的に研究して、歸納的に先づ諸國民の發達の平行線を構成し(Parallismbildung)、更に事實の益々詳しく觀察によりて之を自然法則に練り上げんとして居るのである。然らば右の演繹的及び歸納的の二方法の間に、彼は如何なる論理學的連絡を立てたか。彼自身は別に此の點に注目しなかつた様である。併し若し彼の國民發達法則なるものは純自然法則であるならば、或は少なくとも純自然法則であることを目的とするものであるならば、右の二方法の關係はつまりミルが逆演繹法と稱するもの(前々號「ミルの社會學概念」參考)として規定さる可きである。併しロツシャアが彼の國民發達法則に就て實際に期待する處のもの、即ち彼の國民發達法則が目的とするものを考へると、夫れは純粹なる自然法則、純粹なる抽象的類的普遍法則ではあり得ないことが發見される。

今ロツシャアの國民發達法則の論理的性質を詳しく吟味すると、夫れは抽象に基いて立てられたる運動法則の如きものとも、亦直觀的に明證的なる數學的公理の如きものとも、異なつて居ることが見出される。若し夫れが抽象によりて立てられたる法則であるとする、夫れは本來内容の空虚なものである可きで、かくてロツシャアが夫れから期待する目的に役立つことが出來な

い。是れロツシャ―が國民の發達を結局國民の年齢階段に還元せんとする主意は、國民の各文化現象隨ふて經濟現象を一の普遍的概念の中に其の特殊の場合として攝取せんとするのではなく、各文化現象隨ふて經濟現象の進行を、一切の國民的文化現象の一の普遍的内容包括的聯結中に、其の構成分として編入せんとするものであるからである。併しそうであるとする、國民の隆盛、老衰及び滅亡の概念は、明かに内容的包括的概念として考へられねばならないので、そうして又國民の隆盛、老衰及び滅亡は無限的に復合的なる一過程にして、當に其の經驗的規律性のみならず、其の論理的必然性も、公理的に只直觀的認識にのみ與へられるものと認められねばならぬのである。されどロツシャ―はかゝる直觀的認識を認めて居なかつたと思はれるから、彼の國民發達法則は只直觀的認識にのみ與へられる公理として、立てられたものと考へることは出來ない。然らばロツシャ―は如何にして、彼の國民發達法則及び國民經濟法則を論理的徹底的に確立することが出來たであらうか。

夫れに就ては二つの途が可能であると考へ得られる。其の一は常に繰り返す複合的過程をヤハリ常に繰り返へす一定の個別的諸過程から説明することを、吾人が部分的諸過程の連續及び聯結に於ける法則的必然性の證明によりて到達せんとする目的として、取扱ふことである。此の場合には全體過程は個別的部分諸過程の合成果となる。併しロツシャ―は此の途をとり得なかつた。

是れ彼は國民の隆盛、老衰及び滅亡と云ふ全體過程を、經濟過程及び其の他一切の部分過程の基
本或は根基と見て居たからである。其の二は分出主義の立場をとり、經驗的現實態を「理念」の分
出或は流出と認め、そうして個別過程は「理念」から必然的に引き出し得らる可きものとして、
又最高「理念」は複合的全體過程に於て、直觀的に認識し得られる様、自から顯現せねばならぬ
ものとして、解することである。併しロッシャヤーが意識的に排斥して居たのは此の方法であつた
ので、彼は云ふまでもなく意識的には此の方法をどうとしないかつたのである。しかも彼は直觀
的認識を認めず、又第一の途或は方法をとり得ない以上、彼の國民發達法則を論理的徹底的に確
立せんとするに於ては、到底此の第二のヘーゲル的な途或は方法をとり入れざるを得なかつたの
で、かくて彼は知らず識らずに此の方法に近づいて居たのである。

(六) ロッシャヤーの宗教的信仰

却説以上述べ來りし如く、ロッシャヤーは表面に於ては或は意識的には、ヘーゲルの哲學を極力
排斥して居たのに拘らず、知らず識らずにヘーゲルの概念論及び分出主義の立場に接近し、或は
之をとり入れざるを得なかつたので、そうして夫れが爲めに彼の根本思想は論理的矛盾を含むも
のとなつて居るのである。是れ彼は今日吾々の解するが如き意味での自然科學と歴史科學との區

別や、又自然科学と文化科學或は精神科學との區別を、まだ認識論的方法論的に辨別し確立し得なかつたが爲めである。かくて彼が立てんとせるか如き歴史學の概念を論理的徹底的に確立せんとするに於ては、彼はヘーゲルの概念論及び分出主義の立場をこらざるを得なかつたと思はれるのである。然らば彼は知らず識らずに此の立場に接近し、或は此の立場をとり入れながら、しかも意識的には極力之を排斥せんとしたのは何故であるか。

吾人は其の理由としては、先づ彼が師事せるランケやゲルフィヌスやリッターの影響を認めなければならぬが、併し其の最とも深き理由としては彼の宗教的信仰を挙げねばならないと思ふ。是れは吾々が歐米の學者の説を深く理解せんとするに當つて、常に注意せねばならない點で、彼等の純學問的研究も、彼等が幼時より養はれたる基督教的信仰によりて、屢々無意識的に深く影響されて居るのである。併し其の宗教的信仰を著書論文書簡等の中に陳述して居ない學者にありては、吾々は只推察するより外に途はないが、ロツシャーの如く其の宗教的思想を述べたる遺著の公にされた人々の場合には、吾々は幸ひに明かに其の宗教的信仰を學ぶことが出来るので、又夫れによりて其の學説は根本的に何れの點に於て、宗教的信仰の影響を受けたかを覺ることが出来るのである。

此處にロツシャーの宗教的信仰に就て、特に論究する必要も亦餘白もないで、只彼がヘーゲル

哲學を排斥した根本的理由として、重要な意味を有する一方面を擧示するだけに止めるが、要するに彼は神は無限的精神にして、人間は有限的精神であると固く確信して居たのである。かくて彼は人間の有限なる知力、論辨的思惟を以て、神、世間及び人生を悉く論理的に知り悉くすることは不可能であつて、如何に人知が進歩するとも、常に知り得られない、説明されない或物が残るものと考へた。彼の考へによれば、世界及び人生は本來不合理であるが故に、吾人は之を合理的に理解し説明し悉くすることが出来ないのではなくして、吾人の認識力思惟力が有限であるが故に、之を合理的に理解し説明し悉くし得ないのである。殊に有限的精神たる人間が、無限的精神たる神を、論理的に完全に把握すると云ふが如きことは、絶對的に不可能であつて、かゝる企圖を抱くことは神に對する冒瀆である。さればロツシヤ一は總てを、神をも悉く論理的に理解せんとするヘーゲルの汎論理主義の如きものは、宗教的罪惡であるが如き感じを抱いて居たと思はれるのである。要するにロツシヤ一の學問的考察は根本的には常に彼をヘーゲル哲學の立場に近づけたのであるが、しかも彼の宗教的信仰は常に之を妨止したのである。かくて彼は種々なる論理的矛盾に陥つたのである。

却說ロツシヤ一の歴史經濟學の根本思想とヘーゲル哲學との關係に就て、以上述べ來りし事を顧ると、ロツシヤ一は方法論的には歴史學を哲學から獨立させ、之れに對立する學問として建設

せんとしたが、しかも當時の認識論はまだ自然科学的方法と歴史科學的方法との區別や、又自然科学と文化科學との區別を確立するまでに、發達して居なかつたが爲めに、彼の折角の方法論的企圖も全く失敗に了り、歴史學殊に歴史經濟學の研究の實際に於ては、只歴史的事實をとり入れたゞけで、理論に於ては根本的には自然科学の古典經濟學の上に出づることが出來ず、殊に方法論的には極力哲學を排斥しながら、しかも實質的には多數の哲學的思想否な神學的思想さへもとり入れ、更にヘーゲル哲學を特に排斥しながら、常にヘーゲル哲學の立場に近づかざるを得なかつたのである。今や我國に於て經濟史の研究が大に勃興し來れるに際して、余は我國の經濟史研究者が、特に右の事實に注目されんことを切望する。今日の學問論に於て確立されつゝある自然科学と文化科學との區別及び普遍化的方法と個體化的或は個性化的方法との區別をよく了解せずして經濟史を研究し、又夫れに基いて理論經濟學を建設せんとするに於ては、何人でもロツシヤの轍を踏まざるを得ないかと思はれるのである。